

「宇宙のみなしご」を読んで

一年 讃岐 彰人（平成七年度）

ぼくには、「手をつないで心の休憩ができる友」がいるだろうか。そして、友は、ぼくを「心の友」と思ってくれているだろうか。

この本を読み終わった時、ふと、考えこんでしまった。毎日、ご飯を食べ、学校へ行き、勉強と部活に疲れ、ふろに入りまた寝る。そのくり返しの生活が、少し退屈で息がつまりそうになっても、あたり前のことだと思っていたのだ。

しかし、この本に登場する、姉弟の「生きる姿」を知った時、ぼくとは、何かが違うことに気づいた。

二人は、とても仲のよい姉弟だった。

いつも、ときめきながら、物事を見つめている。遊びも、他人の屋根にのぼるといふスリル満点の事を考えたり、また友達が悩んでいる時は、最後まで真剣に考えたり、真正面から、どんなことにも立ち向かっていく姿勢は、とても新鮮で、あたたかい気持ちにしてくれた。なぜ、いつもこんなにまで、ときめく事ができるのだろうか。なぜ、こんなにまで強くなれるのだろうか。それは、本当に「生きている」からなのだと思った。「本当に生きている」とは、どんな事にも目を開き、

自分の足で歩いて、足あとを残すことではないだろうか。

この本を読んでいた日、星がとてもきれいな事に気づいた。ぼくは、すい込まれるように屋根の上にのぼった。好きな歌を初めて聞いた時と同じような感動を覚えた。家も、木も、車も本当に寝ているように見えたのも不思議だった。星は、ぼくを歓迎してくれ応援してくれているかのように、精一杯輝いてくれた。とてもうれしかった。その二日後、天気が悪かったが、雨の晴れ間をねらって、足がすべらないように、注意しながら、もう一度のぼってみた。ようやくのぼって見た空は、今までぼくが一度も見えた事がない空だった。暗く、荒々しく、のしかかってくるような濃紺の闇の空かこわいものに見えた。声も出なくなってしまうような空に、一つ輝いては消えたりする小さな星を見つけた。時がたつのも忘れ、その星がずっと消えないで光り続けることを願っていた。そんな空を見ながら、ぼくは、心の中で何度も同じ言葉をくり返していた。「ぼくたちは、宇宙のみなしご。ばらばらに生まれて、ばらばらに死んでしまう。自分の力でキラキラ輝いていないと、宇宙の暗闇にのみこまれてきえてしまう」

なぜかわからないが、とても悲しくなり、言葉が出なかった。晴れた日の空を見た時のうれしさは、今日は、どこにもなかった。

なぜ、こんなにも空の様子が一瞬にしてかわってしまったのだろう。二つの姿を見せてくれた空は、ぼくに何を伝えよう

としたのだろうか。この時ぼくは、目が覚めたような気がした。今まで、人にだけ頼って生きてきた自分がとてもはずかしかった。めんどろくさい物に目をそむけ、自分の足では、決して歩けなかった。弟とけんかをするたび、ぼくだけをしめる母を憎んだりした。心の小さな自分だった事に気づき反省させられた。急に弟の事が気にかかった。いつもけんかばかりして、とても憎らしかった弟だが仲間になりたいと思った。考えてみればぼくは、活発で明るい弟にたくさん助けられて来たように思う。とても大きな存在だったのだ。あまりにも近すぎて気づけなかったのだ。弟がいつも反抗するのは、ぼくに思いやりの心がなかったことを素直にみとめることができた。

「人は決して一人では生きてはいけない」とぼくは信じている。「人」という字のように互いに助け合い生きているのだ。

今、いじめによつて、登校拒否や自殺をする人が増えていく。生きるという事は、とても難しく大変なことだけど負けではほしくなかったのだ。一番しんどい時は、だれでも一人だとぼくは、知っている。けれど、必ず友は助ける船を出して暗闇から連れもどしてくれるはずだ。宇宙の暗闇にのみ込まれてしまわない方法。それは、友と友が電流が流れるほどに、手をつなぎ合い不屈の笑顔を見せつけてやればいいのだ。頭と体の使い方しだいで、この世界は明るいものにもさみし

いものにもなる。みなしごが生きのこるためには、必ず手をつないで心の休憩ができる友を見つけることが大切と言えるだろう。

ぼくは、決して二つの姿を見せてくれたあの時の空を忘れることはないだろう。苦しい時は、精一杯輝く星を思い出し、うれしい時は、空一面に輝いたあたたかい星を思い出したい。そうすれば、宇宙の暗闇にいつも新しい挑戦状を持ち続けられる。与えられた事を与えられたままに生きるのではなく、いつもドキドキときめく自分でありたい。